HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	資本輸出研究序説
Author(s)	佐々木, 隆生
Citation	北海道大學　經濟學研究, 28(1), 299-314
Issue Date	1978-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31414
Type	departmental bulletin paper
File Information	28(1)_P299-314.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

資本輸出研究序説

佐々木　隆生

目　　次

1．問題の所在
2．A．スミスの資本輸出論――『諸国民の富』第一篇第九章の規定をめぐって（第27巻　第3号）
3．D．リカードゥの資本輸出否定論（第27巻　第4号）
4．古典派経済学における資本輸出論の意義と制約――『資本論』第三部第三篇における資本輸出規定把握によせて（本号）

4．古典派経済学における資本輸出論の意義と制約

――『資本論』第三部第三篇における資本輸出規定把握によせて

(1)

A.スミスとD.リカードゥによって開示される資本輸出についての古典派的見地は，資本蓄積に伴う利潤率の傾向的低落の認識の枠内に資本輸出の原因を把握することを一般的方法とするものであった。だがそれは，形式的な対置からみる限りでは，スミスの基本論理を支える諸規定に対するリカードゥの否定を内包するものでもあった。では，両者の対立は，如何にして止揚されうるのであろうか。この問題に答えるためには，あらためて，形式的な否定の背後にある両者の基本論理の関係を検討し，対立の内実を明らかにしなければなるまい。それによって，始めて『資本論』第三部第三篇「利潤率の傾向的低落の法則」第十五章「法則の内的諸矛盾の開展」第三節「人口過剰のもとでの資本過剰」で与えられるかの規定の学説史的過程との関連も明らかになりうるものと考えられる。

さて，スミスとリカードゥの資本輸出論の関係をみて先ず指摘さるべきは，

リカードゥによるスミス否定が，一義的に古典派的な見地の分裂を指示するものではなく，古典派的見地の彫琢の関係，或いは継承の関係を含んでいることであろう。リカードゥのスミス否定は，第一にスミスがポジティブに与えた諸規定に対する否定において，第二にスミスが看過した規定のポジティブな把握において捉えられたが，かかる二様の否定のいずれにも，如上の関係を看取しうるのである。

否定の第一の側面について先ず検討しよう。両者の基本論理の追跡をふりかえるならば，直ちにリカードゥによるスミス否定が，スミスの諸制約を批判しつつなされた古典派的見地の彫琢であることが受容されうるであろう。先ずスミスの資本輸出論について言えば，リカードゥによって否定された諸規定が，利潤率の低落を資本の増大から結果する競争の作用に求めたスミスの利潤率低落法則に，悉くかかわることが明らかである。ところで，かかる法則把握は，前期的諸資本の利潤率低落の合理的評価を法則把握でなさんとしたスミスの重商主義批判の視角に固有の歴史的制約と，支配労働価値説—構成価格論の理論的系譜の制約とに規定される顚倒した論理を本質的に含むものであった。スミスは構成価格論の基礎上で賃銀，地代との内的関連を断って利潤率決定の事情を求め，利子率なり外面的に看取される商業利潤率決定の事情を念頭に置いて，表象そのままに利潤率の水準の決定因を競争に帰したのである。リカードゥのスミス否定は，以上の如きスミスの固有の限界を衝くものであった。リカードゥの利潤率低落法則把握は，穀物法批判の歴史的段階において，すぐれて産業資本の蓄積に即してなされ，投下労働価値説の基礎の上になされたのである。生産物価値の分割部分として利潤を把握するリカードゥに従えば，利潤率は競争の如き外的事情によって決定されうるものではなく，生産物価値の三大階級への分割比率によって決定されるべきものであった。リカードゥの資本輸出論が，スミスと同様に利潤率低落の認識の枠内で説かれるとすれば，それがスミスの限界の批判を伴うことは，けだし当然のことであったと言えよう。スミスが貸付資本に即して資本輸出を把握せんとしたことは，リカードゥによれば法則把握の限界の克服から批

判されるべきであり，同様に内外利潤率差を偏に資本量，したがって競争の量的度合の相違に帰したことは，諸国民経済の階級編成の相違を媒介にする蓄積の国際的展開の様相を考慮する立場からは否定さるべきであり，競争に法則をみるところからくる同義反復的「過剰」資本規定は，各国民経済の階級編成に内在して利潤率を把握する立場からは否定さるべきものであったのである。

さて，以上の如き側面から，リカードゥのスミス否定をみるならば，それを古典派の分裂である，と一義的に規定することは不可能となろう。これ迄みた限りでは，リカードゥのスミス否定は，資本蓄積に伴う利潤率低落の認識の枠内に資本輸出の原因を把握する見地を，リカードゥがスミスから継承するに際して，スミスの利潤率低落法則把握に内在し，それ故に資本輸出論にもみられる歴史的制約と論理の顚倒性を克服したものである，と捉えうるからである。リカードゥの資本輸出論は，その限りでは，支配労働価値説から投下労働価値説への価値論の深化に伴うところの，また重商主義批判から穀物法批判へのブルジョア社会への移行に伴うところのブルジョア社会への古典派的反省の彫琢の一成果であった，と考えられよう。

では，否定の第二の側面，すなわちスミスが看過した外国貿易と資本輸出との関連をリカードゥがとりあげ，その結果として資本輸出否定論を展開するに至ったことにも如上の関係を看取しうるであろうか。既に検討した限りでは，スミスが外国貿易と資本輸出との関連を看過した直接の原因は，『諸国民の富』における資本蓄積論が，第一篇第九章のそれと第二篇のそれとに分裂していたことに求められうるであろう。産業的蓄積の認識の枠内で資本輸出を捉えることのない『諸国民の富』において，外国貿易と資本輸出との関連は，到底問題とされるわけがなかったのである。リカードゥが，スミスにあって切断されていた糸をひろいあげ結びえたのは，産業資本の蓄積の中心問題に利潤率低落を置き，しかもそこに結果する諸階級の対抗的性格を独自に把握することによって，穀物法批判の理論的基準を明らかにしたがためであった。古典派蓄積論の体系的統一，これがリカードゥによるスミス否定の第二の側面に，先ず看取しうるであろう。このことが，リカードゥによる

スミスの蓄積論の，継承・彫琢の一環をなすことは言を俟つまでもなかろう。

ところで，なお注意すべきことは，リカードゥがスミスの如き蓄積論の分裂を克服して外国貿易と資本輸出とを関連せしめて考察した結果が，即ち資本輸出の否定が，『諸国民の富』に既に伏在していたということである。けだし，外国貿易と資本輸出との関連を考察しなかったとはいえ，スミスは，産業資本の蓄積が，自由貿易の合理性に導かれる有無相通的貿易の発展に対応する限り，何ら制限されるものではない，と考えていたからである。これ迄のスミスの基本論理の追跡においては触れなかったこの点について，あらためて『諸国民の富』にたちかえって，明らかにしておく必要があろう。

さて，そもそもスミスが生産的労働を規制するものとしての資本の蓄積をみるに，利潤量を重視し利潤率を外在的前提とした事情は，単に第一篇第九章の論理の性格によるのみならず，利潤率の低落を利潤量の増大が補償するとみたことにも求められるべきであった。それ故にこそ，スミスは利潤量の増加の視点からみられた資本蓄積の調和的性格を，資本投下の自然的順序に関する理論，即ち農業の資本主義的発展を基礎にした国内市場と近代産業形成の合理的発展の方向性についての理論の内に説いたのである。だが，かかる理論は，決して国内農工業の比例的発展に基づく国内市場の自律的展開を主張するものではなかった。スミスが第二篇第五章，或いは第三篇で説くところは，資本主義的発展の合理的方向が農業の子孫たる製造業の発展にあるというものであったが，それは決して農業に資本主義発展の主な推進力をみるものでもなければ，農工両部門の比例的発展を合理的に評価するものでもなかったのである。スミスによれば，資本主義的発展は，必然的に富国における製造業の生産力上の優位をもたらすものに他ならなかった。第一篇第一章で，周知の如くスミスは言う。農業における労働の生産諸力の改善は，製造業のそれよりもたち遅れ，富裕な諸国民は製造業における優越性で隣国民をより多く引き離すものである，と。[69] スミスは，明瞭に一国内において製造業が農業より急速に発展することを認めているのである。さて，かかる不均等な発展が，外国貿易に結果することは，言を俟つまでもなくスミスの主張

したところである。第二篇第五章で，スミスは第一篇第一章の論理を受けて，資本投下の自然的順序についての理論の延長上に，産業的蓄積の結果としての外国貿易について論じている。ある特定の産業部門の生産物がその国の需要を越える場合，このような「剰余」(surplus) は輸出され，国内で需要あるものと交換されなければならないのである，と。[70] 換言するに，スミスによれば，国内における社会的分業の一面的形態での発展は，国際分業に帰着するのであり，そのことによって，はじめて国内における社会的分業は最高度に完成され，また社会の富と収入も最もすみやかに増加せしめられうるのである。利潤量の増加が利潤率の低落を補償するとみるスミスの論理の具体化を，ここにみることができる。

ところで，如上の農業を基礎とした国内市場と近代産業の形成の結果としての不均等発展が外国貿易の発展と照応的に展開し，したがって社会の富と収入が最も合理的な方向で増加しうるのは，スミスによれば，自由貿易が実現している場合に限られねばならない。けだし，保護貿易や諸々の貿易制限ある限り，有無相通的外国貿易の発展は制限を受けざるをえないからである。第四篇においてスミスは言う。社会の年々の収入は常にその勤労の年々の生産物の交換価値と等しい。もし，外国が自国で生産しうるより安価に生産し，供給しうるならば，等額の資本が国内で生産したであろう諸商品の交換価値の一部で，その商品を購入しうる。さすれば，社会の勤労は，国内ではより有利に生産しうる用途に向う。その場合，企図された製造業が確立されないとしても，その社会は決して貧しくなることなく，最も収入を増加せしめる。これに対して貿易制限があるならば，社会の勤労は有利な用途に向けられることなく，したがって社会の勤労と収入の総量の増加は抑止されることになる，と。[71] 換言するに，スミスによれば，一社会の富と収入の最もすみやかな増大は，世界市場で自由貿易の商品経済的合理性が維持される場合に実現されうるのであり，またその場合には，富国と貧国のいずれもが最もすみやかに富と収入を増加させうるのである。

問題にたちかえろう。以上で概観したスミスの外国貿易論をみるならば，

スミスが，自由な世界市場の拡張ある限り産業的蓄積に何らの制限なし，とみていたことは疑いないところであろう。スミスが，蓄積論の分裂に規定されて，産業資本形態での資本輸出を問題とする理論的基礎を明らかにしえていないことは確かであるが，他面，以上のような外国貿易論をみるかぎり，スミスに，産業資本の輸出，或いはその「過剰」(redundancy) が生じえないとする論理があった，と推論しうるのではあるまいか。なお，スミスは第二篇第五章にみる如く，資本の「余剰」(surplus) の生ずることを考察してはいるが，それは重商主義が否定され製造業が市場を見出し発展する限りでは，生じないものであろう。

さて，リカードゥが外国貿易と資本輸出を関連せしめ，結果として資本輸出を否定した論理は，以上の検討によれば，既にスミスによって，蓄積論の分裂という制約をはらみながらも，準備されていた，と考えられうるのである。なるほど，蓄積論の分裂を一見するならば，スミスは資本主義の前提としての世界市場における前期的諸資本の無性格なコスモポリタニズムのみをみて資本輸出論を構成し，他面リカードゥは資本主義的世界市場がすぐれてナショナルな規定を受ける資本の運動の舞台であることをみて資本輸出を否定しているのであるが，両者の基本論理は，産業的蓄積，すなわち生産的労働を規制するものとしての資本の蓄積把握の関係からみるならば，継承関係にあったと考えられるのである。スミスに伏在していた論理をリカードゥがとりあげ，ポジティブなものとしたということ，これがリカードゥのスミス否定の第二の側面について結論しうるであろう。

ところで，如上の継承関係は，明らかにリカードゥがスミスにあって分裂していた蓄積論を統一的に把握することによって，もたらされたものに他なるまい。ここに，リカードゥのスミス否定が，すぐれてスミスにあった制約すなわち蓄積論の分裂を克服し，その古典派的彫琢をなすとともに，スミスに伏在していた資本輸出否定論を継承し，資本輸出論の全体を古典派的に彫琢したことを，看取しうるであろう。

さて，これ迄の検討の限りでは両者の基本論理の関係は次のように把握しうるであろう。すなわちリカードゥの資本輸出論はスミスが基本的に与えた

論理，即ち１）資本蓄積に伴う利潤率低落から内外利潤率差が生じるとすれば，世界市民的性格を有する資本は，利潤率のより高い国々へ輸出される，２）自由貿易下における外国貿易の発展は，生産的労働を規制するものとしての資本の蓄積を発展せしめるが故に，産業資本形態における資本輸出を否定する，という二様の論理を，スミスの資本蓄積論に内在する諸制約―その歴史的限界，論理の顚倒性，認識の分裂―を克服し，継承したものである，と。だが，このような関係は，リカードゥによるスミス否定の一面を物語るにすぎない。もし，継承の関係が形式的に対置した結果得られた否定の凡てをなすとすれば，対立の内実は与えられるべくもなく，また否定は否定として規定されえないのである。リカードゥによるスミス否定の他の一面が検討されねばなるまい。

69）A.スミス，前掲書，邦訳Ⅰ，70―72頁，参照。

70）同上，578頁，および668―669頁，参照。

71）同上，680―683頁，参照。なお，このようなスミスの見解について，些か触れておくべき点がある。それは，外国貿易の原因を「剰余」に求める見解と国際分業が各国生産費の差等に起因して形成されるというここでの見解とが両立しえないのではないか，とする疑問についてである。このような形でスミスの外国貿易論に矛盾をみる見解の代表例として，S．ホランダーの前掲書を掲げることができよう（S. Hollander, op.cit. pp. 265―276., 邦訳，388―401頁，の第九章「外国貿易：理論と政策」参照）。

私見はホランダーの見解とは異なる。スミスは，資本の蓄積，或いは資本主義的生産が任意の規模では発展しえないことを認識したうえで，資本主義的国際分業が，すぐれて資本主義の発展した諸国の生産の拡大，更にまたその内部の生産諸部門の不均等な発展にもとづいたところの資本の強制によって形成されることを，「剰余」認識において表現している，と言えよう。スミスの問題は，その先にある。すなわち，スミスは第二篇第五章の中では，不均等発展を規制する要因を，潜在的には第一篇第一章の論理から生産諸力の変革におきつつも，それを資本蓄積を規制するところの利潤にかかわらしめず，潜在的にかかわらしめているとしても利潤率と切断されている利潤量にかかわらしめているのであり，更に第四篇から行論で紹介した論述では，「剰余」認識から離れて国際分業形成の，したがってまた不均等発展の規制因を，労働節約効果と利潤率とをかかわらしめることなく労働節約効果に求め，更にまた労働節約効果と利潤量とを無造作にかかわら

しめつつ利潤量にも求めているのである。リカードゥはこれに対して，既に触れた如く，労働節約効果と利潤率との関係を明確に規定するに至らないまでも，比較生産費原理から国際分業形成を説いたが故に，不均等発展の規制因についてはスミスの如き混乱に陥入ることがなかった。だが，リカードゥはそれ故に「剰余」を認識することなく，また商品経済的合理性の枠内で不均等発展の規制因を説く結果になったと言えよう。このような両者の見解に，商品経済的合理性の論理としての自由貿易の調和性を主張する古典派の限界をみることが可能であるが，そこから生ずる論理の矛盾なり限界は，それ故両者では異なって表現されている。スミスの場合には，小林　昇教授が指摘する如く（前掲書，227—228頁参照），一度資本投下の自然的順序を説くにあたって生産諸力の発展の速度を念頭に富国における製造業の確立を必然的なものとして把握しながら，自由貿易を論ずる際には貧国が農業に特化することを合理的なものとしている点が問題であろう。リカードゥの場合には，その様な矛盾は表面的にはないが，後に触れる如く，『原理』第六章の問題が第七章では消失してしまっていること，更にまたセエの販路説を前提として比較生産費原理にのみ国際分業形成の論理を求めていること自体が問題となろう。

ところで，以上の如くスミスの見解を捉えたとしても，なおホランダーの言う如く，スミスが外国貿易論を二様に説いていたのではないか，との疑問が生じうるかも知れない。確かに，スミスは行論で紹介した論述をもって明確に不均等発展の内的規制因と把握していないが故に，二元論的考察に陥入っているといえよう。ところで，かくスミスが二元論に陥入った理由には，他の事情もある。それはスミスが自由貿易の商品経済的合理性から国際分業形成の論理を説いていること自体に基づいている，ということである。そのようなものとしての商品経済的合理性は，平等な商品所有者同士の交換を前提するものであって，資本主義的貿易が自由貿易において最も発展しうるとする論理においては，形式的な意義しか有しえないものではあるまいか。「領有法則の転回」になぞらえて言えば，その論理の内容は，「結果としての世界市場」を求める資本蓄積に内在する強制でなければなるまい。一方で資本蓄積に内在する強制を「剰余」において認識するスミスが他方で自由貿易の合理性を商品経済的なそれにおいて把握したこと，更にそれを国際分業形成の論理としたことに，スミスの二元論的把握をもたらした事情をみることができよう。なおスミスと異なり，リカードゥが二元論に陥入らなかったことは，後にみる如く，正に外国貿易を商品経済的合理性からのみ論じたことに対応する，と言えよう。なお，ここで述べたことを含めて古典派外国貿易論及び『資本論』に基づく外国貿易論については，これ迄の論争から生み出された労作に私見を対置することもあわせて，別の機会に論ずることを約したい。それを取りあげることは，小論の課題をはるかに越えるからである。

(2)

形式的な対置からみられたリカードゥのスミス否定は，一面ではスミスの開示した資本輸出についての古典派的見地の継承と彫琢であった。だが，そのようなものとしてみられる両者の基本論理の継承関係は，不可避的に非和解的対立を伴うものでもあった。何となれば，リカードゥによるスミス否定が，継承を含むとしても，それは古典派的見地を彫琢する限りにおいてなされるものであったからである。敷衍して言えば，リカードゥは，資本主義の調和的性格を首尾一貫した論理として明らかにする限りにおいてのみ，スミスの論理を継承し，他面では資本主義の内在的制限に対するスミスの素朴な観察を否定したのである。そもそも，土地所有の利益が資本蓄積の制限をなすことを説き，もって穀物法撤廃の理論的根拠を明らかにすることを主要な課題としたリカードゥの経済学が，スミスの一面を継承して，資本蓄積の制限を資本にみるマルサスとの論争の所産であったことは，周知のところであろう。両者の資本輸出論が，ともに資本蓄積に伴う利潤率低落の認識の枠内で説かれる限り，資本蓄積の制限をめぐる両者の対立は，資本輸出論にも投影されざるをえなかったのである。

リカードゥによるスミス否定の第一の側面に，如上の事情をみるのは容易なことであろう。他ならぬ資本の「過剰」(redundancy)をめぐる対立がそれである。確かにスミスの資本「過剰」把握は，一面ではそれが引き出される利潤率低落法則の論理の顚倒性に規定されて同義反復的なものでしかなかった。しかも，あらためてふりかえってみるに，スミスの資本「過剰」それ自体の規定にあたって意味をなす「かなりの利潤」の概念は，それがリスク等を含む国内資本充用上の利益とかかわるかぎりでは，リカードゥも些か異なる仕方で認識しており，その意味ではリカードゥの資本輸出論は，スミスの制約を解決するものでさえあったのである。だが，リカードゥが，単にそうした諸事情から，資本過剰を否定するに至ったわけでないことは，既に明らかである。あらためて両者の論理をふりかえろう。スミスによれば，第一に，

「かなりの利潤」を獲得しうる以上に内外利潤率差が生ずるならば，資本は国内充用の飽和点を越えるが故に「過剰」となり外国へ輸出されるのであり，そして第二に，そのような「過剰」は，もっぱら資本の蓄積それ自体の発展に内在するものであった。リカードゥの見地は，それに対して次のようなものであった。すなわち第一に，資本投下はより高い利潤率の選択の故に決定されうるのであり，決してその国の資本が過剰になったが故に資本輸出が生ずるのではない。何となれば，何らかの利潤あるかぎり資本は生産的に使用されうるものであり，またそもそも需要は生産によって決定されるが故に資本の過剰はありえない。第二に，資本蓄積の動機が失われる如き蓄積の限界が生じうるとしても，それは決して資本蓄積に内在する制限の故にではなく，必需品騰貴の結果としての労賃の上昇によって生ずるものである，と。両者の論理が非和解的に対立していること，更にリカードゥによるスミス否定が，資本蓄積の調和性を理論的に表現するものであることが，明らかであろう。『諸国民の富』第一篇第九章と『原理』第六章，第二十一章の対立に直接的に規定される両者の資本輸出論の対立と，その意味がここに示されよう。

さて，如上の対立関係は，リカードゥのスミス否定の第二の側面にもみられよう。何となれば，両者の外国貿易論は蓄積論の延長上に展開されたからである。リカードゥが，『原理』第二十一章で以下の如く述べ，スミスの外国貿易論に異議を申し立てているのは，周知のところであろう。即ち，スミスによれば，国内生産が国内需要を超過するが故に外国貿易は生じ，もし輸出入が円滑になされないとすれば，国内生産の一部は中止されるのであるが，需要には何らの制限もなく，[72] また利潤率が生じうるかぎり資本の蓄積には限界はありえないが故に，それは誤りである，と。[73] 比較生産費原理に国際分業の規定因を求める『原理』第七章の外国貿易論は，このようなスミスの外国貿易論に対する批判の上に，成立するのである。無論，このようなリカードゥのスミス批判は，或る意味ではスミスの理論的弱点を衝くものであった。けだし，スミスにあっては，農工不均等発展をもたらす上で製造業における

生産諸力の変革の有する決定的意義が認識されているとはいえ，かかる不均等発展を内的に規制する利潤率の意義を看過していたからである。[74] リカードゥは，その点，比較生産費原理をもって，不均等発展を内的に規制する法則を把握したのであった。[75] とはいえ，リカードゥが，それとともに，スミスがみた市場拡大の必然性，或いは不均等発展がすぐれて資本主義の発展した国において生ずるが故に国際分業が資本主義の発展した諸国の強制の下に形成されることを否定したこと，これに注意すべきであろう。そのような否定に深くかかわってリカードゥは，資本主義的世界市場の調和性を，首尾一貫した形で説いているのである。すなわち比較生産費原理が有する商品経済的合理性からのみ国際分業形成の論理を説いているのである。[76] リカードゥが資本輸出と外国貿易を関連せしめ資本輸出を否定したのは，まさに以上にみるスミス否定の結果でもあったのである。その意味では，自由貿易によって導かれる世界市場の拡大が展望されうる限り産業的蓄積に限界はないとするスミスの論理が，たとえリカードゥによって継承されているにせよ，その継承の関係は非和解的対立を含むものであった，としなければならないのである。

かくして，スミスとリカードゥの対立の内実が明らかであろう。スミスとリカードゥの間には，スミスが「過剰」（redundancy）や「剰余」（surplus）をもって表現した資本蓄積に内在する諸制限の肯定と否定とをめぐる越え難い対立があったのである。無論，そのような意味における対立は，古典派資本蓄積論の研究において，夙に明らかにされているところではあるが，[77] 資本輸出論をめぐる両者の関係に，あらためてそれをみるものである。なお，一言，スミスの認識する資本蓄積の諸制限が，スミスが蓄積にその敵対性を認めた結果である，とすることは，当然のことながら誤りである。資本主義的生産の，したがってまた資本蓄積の調和的性格をスミスは一貫して承認しており，むしろその結果として資本蓄積の認識に問題が生じたことは，言を俟つまでもないところであるからに他ならない。それは，既に述べたところからも明らかであろう。

72) リカードゥが,『原理』第二十一章でスミスの redundancy と surplus の両者を一括して批判していたことは，注67) で触れたところであるが，そこで特にリカードゥがセエの販路説を援用して論じたことは，surplus を批判するためであったとも言えよう。R．ミークは，リカードゥがセエの販路説をとったことに対して，利潤論にではなく，市場における供給の過剰を問題にすることについて意味がある，としている（R. L. Meek, The Decline of Ricardian Economics in England, "Economica" Feb. 1950, Vol. XVll, pp. 43—62., 吉田洋一訳『イギリス古典経済学』，未来社，1959年，9—45頁，参照）が，私もそれに同意するものである。redundancy については，『原理』第六章の論理が特にかかわり，セエの販路説は理論的意味を有していないのではあるまいか。

なお，以上で述べたことと関連して，リカードゥが redundancy と surplus を一括して，しかも外国貿易に関する surplus と仲継貿易に関する surplus とを一括することを含んで，批判していることに，スミス批判としての混乱のみでなく，リカードゥ自身の混乱を見出しうるであろう。詳論することは別の機会にするが，資本と商品の過剰を分離するのは誤りであるにせよ，その内的関連を把握しつつ，区別して論ずることは意味があろうし，またそうしてはじめてスミスの混乱を正しく克服することが可能となるのではあるまいか。リカードゥが資本主義的生産が任意の規模で調整されうるとしたことや，利潤率を資本の内的制限として充分把握しえなかったことを批判する際に，リカードゥのスミス批判に内在する混乱にも注目しておくべきであろう。ところでこのことは，リカードゥがスミスの資本輸出にかかわる redundancy を批判する際に，セエの販路説を援用している論理の問題性を指示するものである。だが，そのことについて詳論することは，上述した課題に対するマルクスの見地の検討とあわせて，別の機会に論じたい。

73) Works, Vol. I., pp. 290—291., 邦訳『リカードゥ全集』第 I 巻，334—336頁，参照。

74) 注71) 参照。

75) 無論,『原理』第七章では，リカードゥは，外国貿易が価値を増加せしむるものではない，とする主張を強調するあまり，不均等発展を内的に規制し，したがって，また国際分業の形成を規制する論理を，利潤率にではなく，労働節約効果に求めていることを看過すべきではない。その限りではリカードゥは，注71) でみた如く，スミスと同じ混乱に陥入っていると言えよう。それ故，吉沢芳樹教授が，「市場の全般的成立のうえにたつリカードゥにあっては，スミスとはことなり，もはや市場の形成＝発展構造の問題は消滅する（リカードゥにおける歴史理論欠如の基盤）。農・工・商（あるいは国内市場国外市場）は，もはや自然的な投資順序の問題として区別されることなく，平均利潤率を一般的規制者とする同一平面での投資諸部門として把握される。』（出口勇蔵編『四訂経済学史』，ミネルヴァ書房，

179頁）と見事に描いているスミスとリカードゥの蓄積論の関係は，蓄積論の延長線上におけるスミスとリカードゥの外国貿易論の関係には全面的に反映しなかった，とも言いうるのである。たとえ，リカードゥが事実上比較生産費原理をもって，利潤率を不均等発展の規制因としている面を理解するとしても，リカードゥの論理を凡てそのようなものである，とすべきではない。

76） リカードゥは，二重の意味で，資本主義的発展が国際分業を強制することを否定している。第一は，『原理』第七章がセエの販路説を前提としていることである。第二は，そこで説かれる論理と第六章との関係にみられる。注71）で触れたことを今少し述べておこう。リカードゥは，そもそも『原理』第六章では，資本蓄積に内在する不均等発展の傾向を賃銀の騰貴に結果する蓄積の内に認め，その故の蓄積の制限の解決を自由な穀物輸入に求めている。その限りでは，リカードゥは，より高き利潤率を求める資本蓄積に内在して，国際分業が形成される論理を展望しているといえよう。だが，第七章では，不均等発展を規制する法則は，比較生産費原理にのみ求められ，資本主義的蓄積に内在して提起される問題は消失せしめられているのである。換言するに，資本主義的蓄積の提起する問題は，比較生産費原理が有する商品経済的合理性によって，あらかじめ生じえない形で説かれている，と言えよう。

77） この点については，富塚良三，前掲書，羽鳥卓也，前掲書などをみられたい。小論は，それらの研究に負うものである。

(3)

これ迄の検討において，資本輸出についての古典派的見地が，すぐれて資本蓄積に伴う利潤率の低落の認識の枠内で資本輸出の原因を把握することを一般的方法とし，その結果，重商主義批判から穀物法批判への歴史的段階の移行に関連しつつ，投下労働価値説の理論的基礎の上で彫琢されてきたこと，及びかかる彫琢が，リカードゥによるスミスの否定を含み，資本蓄積と資本主義世界市場の調和的性格を首尾一貫した形で表現する方向でなされてきたこと，これらが明らかである。

ところで，如上の事情をみるならば，直ちに次のことが受容されうるであろう。即ち，古典派的見地が含むスミスとリカードゥの対立は，スミスの論理，リカードゥの論理のいずれの方向においても止揚されうべくもないことが，である。けだし，スミスの論理の制約が明らかである限り，資本主義の

調和性の否定をスミスの論理の方向で首尾一貫せしめることは科学的反動に結果するであろうし，また[78]リカードゥの論理の方向においては，資本主義の調和性の徹底した承認が前提となるからに他ならない。それは，リカードゥを媒介とした投下労働価値説の科学的深化を基礎として資本蓄積の敵対的性格を明らかにすることによってのみ，その方向においてのみ可能であると言わねばならないのである。『資本論』，特にその第三部第三篇を理論的基準として，資本輸出論研究をなすにあたっての古典派的見地の位置と研究の学説史的意味とが，ここに明らかである。

さて，小論の企図した古典派経済学における資本輸出論の検討は，以上で基本的に終了する。研究は小論冒頭で述べた如く『資本論』第三部第三篇のかの規定の検討をはじめとする資本輸出の理論的研究に移らねばならぬのであるが，なお最後に触れておくべきことがある。それは，かの規定が，これ迄みてきた古典派資本輸出論の制約に対する批判と密着して与えられていることである。

マルクスが，かの規定で言うところは二つである。その一は，資本輸出がなされるのは，外国で就業させられれば，資本がより高い利潤率を獲得しうるからである，ということであり，その二は，そのような資本は，就業労働者人口及びその与えられた国一般にとっては絶対的に過剰な資本である，ということである。小論での検討を念頭におくならば，ここで直ちに，マルクスがスミスとリカードゥを批判していることが明らかであろう。第一に，マルクスの資本輸出の原因についての論理は，リカードゥが主張した「ユークリッドの定理に等しく明快」な論理と同じものである。けだし，マルクスは資本輸出の原因を純粋に内外利潤率差に求めているからに他ならない。その限りでは，マルクスはスミスの同義反復的な資本の「過剰」の論理を批判しているものと言えよう。無論こうしたスミス批判は，マルクス自身の利潤率低落法則の論理から導き出されたものであることは明らかである。マルクスが，如上の論述を与えたのと同じ「人口過剰のもとでの資本過剰」において，次の如く述べているのは，明らかにスミスの法則把握を意識してのことであ

ると考えられよう。

「利潤率は，資本の過剰生産の結果たる競争の故には低落しないであろう。むしろ逆に，利潤率の低落と資本の過剰生産とが同一事情から生ずる故に，いまや競争戦が始まるであろう。」[79]

第二に問題となるのは，マルクス自身が「だが」(aber) と言いつつ，かく輸出される資本を「絶対的に過剰な資本」(absolut ülerschüssiges Kapital) と規定していることである。内外利潤率差を契機として外国へ輸出される資本が，それ自体としては輸出する国にとって「過剰」(redundant) なものである，とするスミスの論理が，これ迄の検討からすればスミスの論理に内在する顚倒性を否定されたうえで，マルクスに継承されていることをみることができよう。当然のことながら，マルクスの言うところに，リカードゥの資本輸出論に対する批判を看取しうるであろう。[80] かくしてマルクスの意図はともかく，『資本論』第三部第三篇のかの規定が，スミスとリカードゥの資本輸出論の制約を基本的に捉えて批判していることは明らかと言わねばなるまい。

だが，マルクスのかの規定が，それ自体においてはともかく，古典派批判としては極めて抽象的であることは言うまでもない。けだし，古典派的見地にあって提起された問題であり，かつまた論点をなしたところの利潤率低落法則の資本輸出に対する規定関係，外国貿易と資本輸出との関連にはマルクスは全く触れてはいないし，更にまたスミスにあっては蓄積論の分裂の故に，リカードゥにあっては貨幣数量説的見地の故に看過されていた産業資本形態での資本輸出と貸付資本形態での資本輸出との関連，及びそのような関連と資本蓄積との関係などについてもマルクスは何らの回答を与えていないからである。無論，この様な抽象性は，かの規定それ自体が資本輸出の理論的研究においても極めて抽象的な性格を有することからくるものであろう。当然のことながら，かの規定を『資本論』の体系に内在して検討し，そこから古典派が提起した問題等に回答を与えうるような資本輸出についての理論的研究が，問題とされねばなるまい。だが，それは明らかに小論の企図したとこ

ろを越えるものである。別の機会に，如上の問題をとりあげることを，したがってまた，その際に古典派経済学における資本輸出論の総括的批判をなすことを約して小論を結ぶことにしたい。

78) マルクス，『剰余価値学説史Ⅲ』，『全集』26巻，の第19章を参照されたい。他ならぬ，スミスの制約を継承して資本蓄積の制限を説いたのはマルサスである。

79) 『資本論』第三部，336頁。

80) この批判には注72) で触れたことがかかわるが，前述した如く，それについての私見は別の機会に述べたい。

（以上）